

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2691800045		
法人名	社会福祉法人 京都聴覚言語障害者福祉協会		
事業所名	いこいの村・とくらの家		
所在地	京都府綾部市十倉名畑町欠戸20番地の1		
自己評価作成日	平成26年1月6日	評価結果市町村受理日	平成26年3月28日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai.gokensaku.jp/26/index.php?action=kouhyou_detail_2013_022_kani=true&JkyosyoCd=2691800045-00&PrefCd=26&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人 京都ボランティア協会		
所在地	〒600-8127京都市下京区西木屋町通上ノ口上ル梅渡町83-1「ひと・まち交流館京都」1F		
訪問調査日	平成26年1月29日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

地元の綾部市東部地域出身の方が優先的に利用できるよう利用基準を設け、共通の経験や話題が日常的に感じられるように工夫している。母体施設のいこいの村聴言センターは設立から30年、地元綾部東部地域の福祉の担い手として事業を展開している。2013年5月に同法人の訪問介護事業所、通所介護事業所、居宅介護支援事業所、地域包括支援センターが隣接する場所に新築・移転し、とくら福祉センターとなり、より地域に密着した事業を進めている。それらの事業所と連携を密にとり、これまでの暮らしの継続が図れるよう努めている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

JR綾部駅から、車で東に20分程走った所で、鄙びた山村の雰囲気を持った地に「とくら福祉センター」がある。二方を山に囲まれ、鮎が釣れるという上林川が流れ、まるで童謡の「ふるさと」の歌詞を彷彿させる風景である。こんな自然環境の中に「福祉ゾーン」としてとくら福祉センターがあり、居宅介護支援・通所介護・訪問介護などの介護事業所が併設されている。その一つにグループホーム「いこいの村・とくらの家」(1ユニット9名)がある。事業所の理念として「住み慣れた地域で一人ひとりが大切にされる家」と表明し、管理職・職員とが一丸となって実践に努めている。社会現象の一つでもある「若い世代」が都会に出て行き、高齢者が残され「過疎地」となって、グループホームのみならず、福祉センターが地域に無くてはならない存在になっている。地域のお祭りには、いこいの村本体からも応援部隊を出し「屋台」など協力して、まつりを盛り上げている。可能な限り在宅時の暮らしの継続を目指し、地域住民との交流を大切にしている。地域からも「災害時の安否確認」の連絡を貰って、双方向での協力体制が確立出来てきている。事業所内部に関しても、介護支援向上に向けての職員の意識が高く、他事業所へ利用者の目線で見学に向き、優れた所を自事業所に取り入れて、介護の質の向上に努めている。入居者は、「自分の思い」を大切にしてくれる職員に守られて穏やかに暮らしている事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「住み慣れた地域で一人ひとりが大切にされる家」を理念に掲げ、支援を行っている。年度を前期と後期に分け中間総括と年間総括を行い、理念の確認や実施状況が理念に基づいたものになっているか係会議で話し合っている。	法人の理念は「自主・自立」さらに「完全参加と平等」としている。この精神に基づき事業所として、職員でアンケートを取り、地域密着型サービスの意義を踏まえた「住み慣れた地域で一人ひとりが大切にされる家」を理念とした。日々、一人ひとりの「思い」「残存能力」を大切にして、その人の希望や出来る事を支援している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の祭りや、近所の幼稚園の運動会に参加し交流を行っている。	地域は、綾部市十倉名畑町となつてはいるが、山村の趣が強く、高齢者は4割を超えている。若い世代は、都会に出て過疎地になっている。その中で、事業所は無くてはならない存在になっている。地域のお祭りには、法人全体で屋台等を仕切って盛り上げている。傾聴ボランティアや茶道や生け花の先生が来所され、双方向で協力し合っている。雪の季節に向けて除雪機を増やし、地域住民の利便も図っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	綾部市高齢者介護課からの依頼をうけ、「もの忘れ相談」に職員を派遣し、認知症の方とその家族の相談支援を行った。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進委員から出された意見から、避難訓練の際に地域の消防団に参加していた。委員のアイデアで、職員からご家族への手紙に、利用者も一筆添えていただいたこともあった。	会議には、行政・包括支援センター・地区自治会連合会・地区法人後援会・民生児童委員・自治会・幼稚園等から其々責任者が出席している。事業所の責任者と共に、情報交換・意見交換が活発に行われ有意義な会議になっている。出席者の都合を尊重し、夜間に会議を行っている。まず、パワーポイントで、入居者の日常生活の様子を紹介してから、運営状況を詳しく報告している。災害時の対応や事故対策・運動不足対策等の意見が出されて、事業所の方針を説明し理解と協力を得る様に努めている。	議事録は、大変くわしく第三者にも理解しやすくなっていますが、一回毎に完結するのではなく、継続性(流れ)のあるものにされたら、更に素晴らしい議事録になるのではないのでしょうか。決定事項・課題を明確にし、一年で総括し、次年度の事業計画に盛り込まれるのも一策だと思われます。運営推進会議が、より重みのあるものになるでしょう。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議に委員として市職員に出席いただき、事業所の実情を伝え、意見をいただいている。	運営推進会議に、市の担当職員が出席し、事業所の状況を把握・理解している。更に、行政の情報等も提供しているので、双方向で現状を理解し協力関係が確立出来ている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束なし。日中は玄関・勝手口などの施錠は行っていない。外に行こうとされる利用者に対しては、職員が付き添うようにしている。 法人内の他事業所と連携して「在宅サービス向上委員会」を毎月開催し、身体拘束に該当するケースがないか点検している。	事業所の方針として「身体拘束をしないケアの実践」に取り組んでいる。毎月法人内で「在宅サービス向上委員会」を開催し、実践状況を把握している。日常的にも、職員で話し合いの機会を持っている。ベッドからの転倒事故が発生した場合、ベッド柵や危ない個所にタオルやクッション性のある物を巻いて、転倒しても大きな怪我に繋がらない様に、職員で話し合い改善している。入居者とも話し合い、ナースコールが使える様になった事例もある。抑制する言葉づかいにも留意している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている。	外部研修に職員が参加し、身体拘束はしないという考え方を学び実践している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるように支援している。	部会の中で司法書士を講師に招き、成年後見制度について学ぶ機会を持った。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている。	24年度介護保険法改定の際には、ご家族に来所いただき十分な説明ができるよう努めた。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	苦情受付窓口、担当者を玄関に掲示している。また、契約の際にも十分な説明に努めている。 法人内の他事業所と連携して利用者アンケートををご家族に送付し、要望や意見の把握に努めている。	家族からの意見・要望等は、来所時や必要に応じて電話等で聞き取る様に努めている。利用者からは、日常的な会話や行動・表情等から聞き取ったり、汲取っている。又、法人で利用者アンケートを家族等に送付して、意見や提案を聞き取る機会とし、在宅サービス向上委員会で纏めて公表する仕組みが出来ている。現在集計中である。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	係会議を月1回開催し、各職員が意見を述べられる機会を設けている。9月に行った敬老祝賀会は、職員同士が相談しながら、企画から実施まで担当職員が行った。	定期的な会議の中で、或いは日常的に意見を出し合って改善に繋げている。職員から出された提案として、他事業所(GH)を訪問し、利用者の立場で実践されている支援を学び、自事業所に持ち帰って実践に繋げている事例がある。午前中のコーヒータイムを利用して、入居者と職員が話し合っただけ立を決める様にした。又、掃除も職員だけにするのではなく、入居者にも手伝ってもらって行う様にもした。良い支援を見習いサービス向上に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人就業規則に則り就業環境の整備を行っている。 施設長は月1回の係会議に必ず参加し、直接各職員の状況を把握できるよう努めている。また、年1回いこいの村聴言センター所長と面談できる機会が設けてある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内で経験年数や役割に応じた研修を企画・実施している。また、どの職員にどの外部研修に参加してもらうかえを施設長と相談し、力量に応じた研修参加を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	府老協グループホーム委員会に参加している。また、他施設での実践を学ぶために他施設研修を実施し、研修と共に他施設の職員と交流できる機会を設けた。施設長と管理者は綾部市介護支援専門員会に加わり、研修や交流に参加している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	馴染みの関係を活かしつつ、出来るだけ本人の居室でゆっくり相談を受けるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前の面接ではセンター方式のアセスメントシートを活用し本人やご家族の状況を把握した。月に1回ケース担当から利用者の近況を手紙で報告し、職員との信頼関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	面接時・入所時のアセスメントを踏まえプランに反映させている。 利用開始については外部委員の参加する利用検討委員会に諮り、様々な立場から意見をいただいている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	自宅での生活を継続できるようにと日常生活のなかで、本人の力が発揮できるよう努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族に定期的通院の付き添いに来ていただいたり、センター方式のシートをご家族に記入いただいたりしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入所前から行きつけの医院や美容院に継続して通えるよう支援している。また法人内のデイサービスに遊びに行き、馴染みの方と出会う機会を持つようにしている。	地域のお祭り(十倉まつり・口上林川まつり等)に参加し、馴染みの住民との交流を楽しんだり、近在の幼稚園の園児や職場体験で訪れる生徒たちとの出合いを喜びとしている。隣に併設されているデイサービスを訪れ近隣の人達と昔ばなしに花を咲かせている。事業所内の畑で、慣れた畑仕事に精を出している入居者もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士のおたがいの不満が顕在化しないよう配慮し、日々の引き継ぎや記録で情報共有している。トラブルのきっかけになりやすい利用者には、職員が仲介に入り良好な関係が保てるよう支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	この1年間、契約終了した方はおられないが、以前は、法人内の特別養護老人ホームに入所された利用者には面会に行き、職員への情報提供を行った。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	24時間シートとセンター方式のシートを活用し、これまでの暮らし方や言葉から本人の意向を把握できるよう努めている。	利用前の面接で、本人・家族等から生活歴や心身状況・思い等を聞き取り、アセスメントシートを作成している。入居後は、日常の会話や行動・表情等をケース記録等に記録して「その人の思い」を把握する様に努めている。24時間シートも活用している。「編み物」が好きだった人には編み物が出来る様に支援している。かつて習いだった「お茶」や「生け花」を、今、専門の先生に御稽古をつけて貰っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所時には全職員で生活歴等の入所前の情報を会議・資料で確認している。また日常的な会話の中で話題にし把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	24時間シートに活動状況や心身の状況を記録し、職員間で共有した上で支援を行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	個別のケース記録や24時間シートにケアのあり方やアイデアを各職員から提案するとともに、月1回の係会議でケース担当中心にモニタリングを行っている。	日々の状況を、細かくケース記録や24時間シートに記載し、一ヶ月でまとめモニタリングに繋げている。その結果を踏まえ、必要に応じて介護計画の見直しを行うが、特に変化がなければ、短期目標の期間(六ヶ月)に合わせて見直しを行っている。見直しにあたっては、家族・かかりつけ医等の意見も反映し、実情に即した介護計画になっている。日常的に、介護計画作成者(介護支援専門員)と医療関係者との密接な連携がとれ、友好関係が出来ている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録・24時間シートを個別に作成し記録を行っている。その記録を基に声かけの仕方・時間等の見直しや工夫を行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	法人内の他の事業所と連携してニーズの変化に対応できるよう取り組んでいる。事業所行事に参加していただけるようご家族の送迎をおこなったり、利用者の急な外出希望にも対応できるよう職員体制を工夫し、可能な限り利用者やご家族のニーズにこたえている。マッサージを希望される利用者には、なじみの治療院と連携し往療をお願いするなどしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地元地域の祭りや幼児園の運動会に参加し、利用者の生活に楽しみが増えるよう努めている。今年度から綾部市社協を通じて、傾聴ボランティアに月2回来ていただいている。また、茶道の経験者にボランティアできていただき、お茶を楽しみながら交流できる場を作っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	基本的に入所前からのかかりつけ医を受診している。かかりつけ医のいなかった利用者には、利用者・ご家族の意向を確認したうえで、協力医療機関に職員同行し受診を支援している。 認知症の進行により専門医への受診が必要となった場合は、ご家族と相談の上、専門医に主治医となっていたいただき適切な医療が受けられるよう支援した。	かかりつけ医の選択は、本人・家族等の希望に合わせている。従来の医療機関に継続して受診している人や新たに事業所の協力病院をかかりつけ医としたり、又、二週に一回往診を受けているケースもある。一人ひとりの状況や希望に合わせて選択できる支援を行っている。現在、当該事業所には看護師はいないが併設の施設(特養等)の看護師がオンコール体制で協力している。夜間の連絡体制も出来ており、24時間対応可能にしている。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週4日、隣接するデイサービスの看護師に様子を見に来てもらっている。普段と様子の違う方があれば受診の必要性を相談したり、判断をおおいだりしている。また、法人内の特養の看護師とも連携しており、夜間の緊急時のオンコール体制や、緊急に医療的処置等が必要になった場合でも対応できる体制を整備している。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院した際には、面会に行き病院関係者との情報交換を行った。退院前には医師・PTから情報を集め、必要な介護用品を事前に整備した。医師との面談を通じて、利用者ひとりひとりの状態や方針を相談し、早期の退院が実現できた事例もある。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化し医療的なフォローが必要になった場合の支援のあり方については、入所契約の時から説明をし、事業所のできる事を理解していただけるように努めている。	事業所として「重度化した場合における対応に係る指針」を具体的に明確にしている。本人の状況を踏まえ、家族・医療関係者・事業所とで連携し、話し合いの上で、支援の方法を選択できる様に努めていく考えを持っている。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	職員全員が救急救命講習を受講している。経験の長い職員から異変に気付くポイントを後輩職員に伝えている。本体施設の特養の看護師にすぐ連絡出来る様に体制を整えている。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災想定・夜間の火災想定・地震想定避難訓練を各1回づつ実施した。夜間避難訓練では地元消防団にも参加していただいた。とくらの家独自で災害用食糧備蓄を確保している。 10月の台風18号の時は自治会から安否確認の為に連絡があった。	昼間・夜間の火災を想定した避難訓練と地震を想定した訓練とで、年3回実施している。夜間訓練は実際に夜8時に地元消防団員の参加を得て実施している。有事には、通報機器により綾部消防署に通報すると、地元消防団に通報される体制が出来ている。運営推進会議でも、災害時対策について話し合わせ、地域との協力体制が確保されている。食糧等の備蓄も備えられている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	不適切な声掛けや対応をしている場面に気付いた際には、会議の場で意見交換したり職員同士注意を促したりしている。	事業所の理念の中に「――一人ひとりが大切にされる家」と表明し、支援に取り組んでいる。入居者の思いを尊重し、特に、トイレへの声掛け・誘導時、入浴時の対応時に、プライドを損ねない様に、羞恥心を抱かせない様に充分配慮した支援を行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常的な取り組みでは職員から強制して行うのではなく、利用者の意思を確認してから参加していただくようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	起床・就寝・食事・入浴など時間を決めず、出来るだけ本人の自発的な動き、ペースにあわせている。希望があれば居室に食事を運ぶなど臨機応変に対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	毛染めや散髪等のお洒落ができるよう支援している。化粧品を毎日使用される方もおられ、使い切った際には購入に行く支援をしている。居室には洗面台が設置されており、起床時には櫛で髪をとかすなど身だしなみが整えられるように支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食器の片付けはほぼすべての利用者がされている。 食事作りは洗う、切る、盛り付けるなどの作業で利用者の力を活かせるよう支援している。 事業所の畑で採れた野菜も食材として使い、食べるだけではない楽しみが提供できるよう努めている。	献立は、入居者と職員が話し合ってたてている。庭の畑で収穫した大根や野菜を献立に取り入れ、作る楽しみ、食べる楽しみを味わっている。近くのお寿司屋さんに来てもらったり、マクドナルドのハンバーガーやフライドポテト等を買ってきて、いつもと違う食事を喜んでいる。その人の力に応じて、下準備や盛り付け等出来る事をして貰い、職員はやさしく見守っている。職員と共に食事時間を楽しんでいる。特に、障害福祉関係者が丹精込めて作った「お米」がおいしく炊かれて、入居者は「ご飯が美味しい」と喜んでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	24時間シートに食事量、水分摂取量を記録し状況把握をしている。 利用者の状況に合わせて、細かく切るなど食べやすくなるように配慮し支援している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	就寝前と起床時に義歯の洗浄を支援している。本人の力で出来る方、声掛けが必要な方など本人の力に応じた支援を行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	24時間シートで把握した排泄パターンを基にトイレへの促しをするなど工夫している。	一人ひとりに応じた排泄パターンに合わせ対応し、トイレでの排泄を支援している。なるべく布パンツに移行できるように工夫しているが、8割弱が紙パンツとパットを組み合わせている。パットをトイレに流される入居者の対応として、トイレ内の目につく所に蓋付きのバケツを置いて説明を繰り返した所、トイレに流される事が無くなった成功事例がある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘気味の方には朝に冷水を飲んで頂いたり、バナナを食べていただくなど自然に排便ができるよう工夫している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	希望される方には毎日入浴していただいている。入浴時間は固定せず、本人が入りたいと思える時間に入れるよう配慮している。入浴したが入浴したことを忘れてしまう利用者には、本人が不安にならないよう、二度目の「入浴したい」という訴えも否定せず、1日に2回入浴していただくこともある。	一人ひとりの希望に合わせて支援している。浴室は広く清潔で、浴槽の真ん中に手すりを横に取り付け、浴槽の中で滑らない様に安定する様に工夫している。ゆず湯なども季節感があり、喜ばれている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	休息は一日中居室で寝ている事にならないよう考慮しながら、本人のペースに合わせてしてもらっている。また特に就寝時間も定めておらず本人のペースに任せている。夜間、見回りの為安眠できないと訴えられた利用者には、ご家族の了解をいただいたうえで、見回りの回数を減らし、安眠できる環境づくりを行った。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方箋をケース記録と一緒にファイルし、目的や副作用について情報共有をしている。服薬もれのないよう支援のマニュアルを作っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生け花や編み物、草引き等の得意な事を活かせる場や、日常的に歌を歌って楽しめる場を設定している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	5月に利用者を2グループに分け遠足に出かけた。日常的な外出としては買い物、畑、デイサービスとの交流などがある。またご家族の付き添いで、他の事業所に入所中の家族に会いに行かれたり、自宅へ帰省されたりする方もおられる。	事業所の周囲は広く日当たりも良いので、天気の良い日には外気浴・日光浴を行っている。畑の草引きや水やり等も気分転換になっている。ただ、冬季は積雪であまり外に出られないが、隣のデイサービスには、出かけて馴染みの利用者と一緒に楽しんでいる。地域の祭りや行事等に出席するのも楽しみにしている。春には、遠足で舞鶴に出かけたりしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金の所持したり使えるように支援している	基本的に現金は預からず施設が立て替える形をとっている。自分で現金を管理されている方は1名おられる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご家族に電話をかける際には利用者にも電話に出いていただくようにしている。 職員が近況報告のためにご家族へ出している手紙に、利用者の一筆を添えていただいたこともあった。年末には希望者には年賀状出しの支援を行った。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	施設は地元の民家を参考に和室、土間スペースを設け利用者にとって馴染みある雰囲気になる様配慮してある。 リビングには利用者の作品や花を飾り、季節感が感じられるよう工夫している。リビング続きの和室にはテレビ、こたつ、ソファを置きくつろげるようにしている。玄関や床の間に花を活けにきて下さるご家族もある。	事業所全体が、昔の民家の佇まいになっている。玄関を入ると広い土間があり、季節の花等が飾られて、訪れる人をやさしく迎えている。リビングは広く、天井は太い梁が縦横に走り風情を作っている。窓も大きくて明るく、外の景色が座りながらにして眺める事が出来る。一方の窓からは、畑が見渡され農家の人達が働いている姿を見ることが出来る。又、窓の外はウッドデッキになっており、ここからも外に出られる様になっている。床暖房が入って適度な暖かさがあり、BGM等かけずに静かな落ち着いた雰囲気になっている。リビングの続きにキッチンがあり、生活感がある。他方には、和室が続き「床の間」には季節の花が活けられている。ソファや炬燵が置かれ、寛げるスペースにもなっている。其々思い思いの場でゆっくりすごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食事の席は利用者同士の相性を考慮し配置している。 食事の席に利用者が集まり、歌を歌い始められたり、和室のソファで休まれたりと利用者思い思いの過ごし方をされている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所時にご家族に本人が使い慣れた物なるべく持参されるようお願いし、タンスやこたつ、食器など馴染みの物の中で生活できるよう配慮している。 家族の写真や位牌、神棚を持ち込まれている利用者もおられる。	個室の前は広い廊下になっており、ドアは綾部名産の和紙が一人ひとり色を替えて貼られている。季節の花や飾り物が置ける小さなスペースも作られていて、利用者の手によって、つばきの花が一輪挿しに活けられていた。廊下の床や腰板にはむくの木が使われ、心が癒される雰囲気になっている。へやは畳になっており、大きな押入れと手洗いコーナーが設けられている。窓も大きく明るくて、外は各室毎にベランダが作られている。天気の良い日には、布団等を干し馴染んだ暮らしをしている入居者もある。使い慣れた家具類を配置して、その人らしい部屋作りをしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	手すりの位置は利用者の身長に合わせて高さを工夫してある。洗面台、リビングの流しも出来るだけ本人の力で使っていただけるよう高さを調整し設計している。		